

健康文化

## 為信さま

今井田 二三子

私達の町に十数代も医業を継承されている医院があり、どういう訳か今も私達はその医院を通稱為信さまと呼んでいます。何代も前の御先祖の名前である事は何時からともなく知っていましたが、何代にもわたり何故為信さまであるのかわかりませんでした。それが今年の五月に為信さまの業績が岐阜の医師会館に展示されたのを拝見する機会を得て長い間の「何故か」が一挙に解決しました。

展示室に一步足を踏み入れたとたん為信さまとその御息の手術記録が目飛び込み、そのとたん全身が震えるような感動を覚えました。それは半紙大の和紙に克明に毛筆で、為信さまのは達筆な草書体で、御息のは几帳面な楷書体で主に乳癌の手術記録が記載してありました。住所、戸主名、年令はもとより、視診、触診の状態、中には腫瘍が周囲に広がり手術をするまでもないと家族に伝えたが伏して頼まれやむなく行うという事まで記載してあり、また切開の方向、腫瘍を周囲の組織より剥離して取り出すときの指先の位置、取り出した腫瘍の外観、割面、腋窩淋巴節の摘出の状況など色彩をほどこされ実に詳細に描かれていました。その記録が百数十枚、一部は綴られ、一部は並べられているのを目にしたとき為信さまと、御息のこの不治の病を治したいと願われる深いお心と熱い思いが時間と空間を越えてひしひしと感じられました。それが震えにつながったのではないかと今思い返しています。障子を通す陽の光だけの部屋で、手術野の消毒をするにも、手術の介助をするのにも想像を絶する困難さがあつた事と思われまます。まして麻酔の状態の観察、患者の覚睡を待つ間の気持ちがいかにあつた事でしょうか。為信さまの信念と情熱がこの和紙の記録の中に込められているかと思ひますと衿を正さずにはおれませんでした。先生は祈りながら記録を認められたのではないのでしょうか。

その時為信さまは彼の華岡青洲先生のところで麻酔と手術の方法を学ばれたと聞き、物語の中の人のように思っていました青洲先生が急に身近に感じられてきました。華岡先生の書も展示してありましたが私が心を打たれたのは為信さまが華岡先生よりいただかれた軸の中の言葉でした。華岡先生は先生の許で

学ばれた弟子に軸を渡しておられた様子で、為信さまのそれには青洲先生の画像の上に先生の直筆で讃が認められ、為信さまの後裔であります F 先生のお言葉によりますと、その意味は自然であって簡素にして、人を深く思うとの事で為信さまを通して青洲先生のお気持ちも身近かに感じられる気がしました。

医者を含め人の心の原点は昔も今も変わらないものであると改めて思い、私自身の生き方の方向づけが今一度新たに心の中でなされたように感じました。

為信さまは青洲先生の心技に御自身の心技を重ねられてメスを握られたのだと思います。その心とメスで救われた何人もの方が当時もあったと思います。その人々が、その家族が、そしてそれを伝え聞いた村の人々が親しみ崇め為信さまと呼び、それが綿々と現在まで続いている事に感動を覚えます。

その当時使われた手術器具も展示してありましたが現代使われているものと大差ないのにも驚きました。それらの器具は今は往年の輝きは消え黒く静まり返っていました。

(内科開業医)